



“MY TOWN” うおっちゃん  
**歩**キ**目**デス  
 & **足**ラテス

Vol.62  
**日土小学校に見る  
 松村イズム**

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
 ヘリテージマネージャー

このシリーズでは、どちらかと言うとあまり有名な建造物はこれまで取り上げないようしてきた。今回は少しいつもと違う。何と言っても国の重要文化財(平成24年12月28日指定)である。しかも、戦後の建物で現役の学校建築は日本初。今となつては、こんなに光が当たっている建物も逆に珍しい。では何故取り上げるのか。八幡浜生まれの私個人の思い入れもあるが、第一に「モダニズム」という分かりづ

らい文化財価値に肉薄してみた。昭和31年と33年の二期に渡って建築されたこの学校の年齢は、まだ50代半ば。一応、文化財としての最低要件である50年以上はクリアーしているが、そうした歴史建造物としてはとても若い。それでも国の重文になった所に、この建物が持つ意味の凄さが表れている。

さて、設計者は松村正恒という人物。大洲市新谷出身で、元八幡浜市職員だった頃の作品である。氏は戦後市役所に奉職し、汽車通で新谷から毎日八幡浜に通われ、珠玉の学校建築群その他を世に誕生させた。生家は大洲新谷藩の家老の家柄だったが、幼少期は里子に預けられたりして家庭的には寂しい思いもされた少年期だったらしい。祖父の松村正直は、幕末から明治維新時の武家社会の激動期に、養蚕の奨励

など武士の暮らしが成り立つよう腐心したらしく、地域の歴史に名をとどめる。氏のその後の生き方を想像すると、「孤高の建築家」という形容詞に見られる如く、武士の気骨というべきDNAの空気が色濃く漂う。

日土小学校が国の指定を受けるほどの名建築という理由は、戦後の木造モダニズムというジャンルに一石を投じ、鉄、ガラス、木という素材を自由に駆使して日本の風土に合った造形を出現せしめた点にあるとされる。



水平連続窓の外観

また、かの建築界の巨匠ル・コルビュジエは、(日本では昭和の始め頃)近代建築の五原則という発表をしている。即ち、「ピロティ」「屋上庭園」「自由な平面」「自由な立面」「水平連続窓」である。この中で、屋上庭園以外は全て備えたのが日土小ということになる。この学校は写真の如く清冽な喜木川に面し、周囲は緑多きみかん山、自然環境の豊

また、かの建築界の巨匠ル・コルビュジエは、(日本では昭和の始め頃)近代建築の五原則という発表をしている。即ち、「ピロティ」「屋上庭園」「自由な平面」「自由な立面」「水平連続窓」である。この中で、屋上庭園以外は全て備えたのが日土小ということになる。この学校は写真の如く清冽な喜木川に面し、周囲は緑多きみかん山、自然環境の豊



川面に張り出すテラス



伊予絣の市松模様

かさは申し分なく、屋上庭園の必要はない。  
 ミスター松村は一体どこでこうした建築最前線の研鑽を積んだのだろう。昭和7年、氏は武蔵高等工科学校（現・東京都立大学）に入学し、奇しくもここでその後の人生が決まったと言ってもいい人物と出会う。蔵田周忠教授、パウハウス帰りの気鋭の建築家だった。東ドイツのワイマールにある建築デザインの学校パウハウスは、ヴァルター・グロピウス校長の元、当時世界の建築界の最先端を走っており、蔵田はその新鮮な空気をもち帰ったばかりだった。産業革命によってもたらされた、コンクリート、鉄、ガラスという大量生産の建築素材を自由に使って、新たな建築様式が模索され、グロピウスが設計したテッサウの校舎に代表されるようなモダニズム思想の一大拠点となっていた。そうした世界の空気を間近に感じられる、恵まれた環境に身を

置いて、勉強熱心な松村が覚醒しないはずはない。蔵田からの薫陶は、想像以上のものであったに違いない。  
 かくて加えて、その蔵田の勧めで卒業後入所したのが土浦亀城事務所。そこは、アメリカの天才的建築家フランク・ロイド・ライトの事務所から帰国して開設したばかりの事務所だった。  
 建築界における世界の三大潮流と言ってもいい、ライト、コルビュジエ、パウハウスなどについて、少なくとも二つの建築思想に直近で接する得難い歩みだったのである。  
 学生時代に蔵田から学んだ“インターナショナル”というまばゆいばかりの建築思想。国際様式、世界共通の様式に向か



各教室の色違いの手洗い場



階段踊り場の花台



棚と曲面黑板



緩やかな階段

さりげない場所の花台、あるいはパステルカラーの彩りなど。きつとモダニズム建築の機能性から来る冷たさを、彼の人間性で優しくオブラートに包んだのが、松村、Sモダニズムなのかも知れない。まさに日土は愛の学校建築である。  
 うとするその時の心の躍動感が熟成されて、やがて八幡浜の地で花開く。加えて、近代の素材によってより機能的にデザインされたばかりでなく、松村作品には独特な温かさと静謐さが漂う。小学一年生に合わせた低い階段や

【舞たうん Vol.113の訂正とお詫び】

県内高校レトロ建築巡り（同コーナー vol.60）において、上浮穴高校の講堂の扁額「向上心変非常」とありましたが、正しくは「日常心変非常」でした。